春と秋

結李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
春と秋

【Ｎコード】
Ｎ０６３１Ｃ

【作者名】
結李

【あらすじ】
紫呉の家から帰る途中に寄り道した紅葉の素敵な出会い

第一話・・・（前書き）

原作読んで無い方はわかりにくいと思いますが……

第一話・・・

「ここどこだろ？」

金髪の少年は山道を歩きながら呟いた。どこか不安そうな雰囲気だ

「しーちゃんちから真直ぐ帰れば良かったなぁ…」

この少年、草摩紅葉は同じ草摩家の紫呉の家から帰る途中だった。
しかし、彼は気まぐれでなんとなく寄り道したくなったのである

「暗くなって来たなぁ～。オバケ出ないかなぁ～」

今、時刻は九時。山だから月明りも差し込まない

「こんなトコにトール、住んでたんだ～」

驚きが隠せない様子で言う

「ここまで来たら、トコトンボーケンよ〜！！」

そう。彼の良いところは転換が早いこと

「あー！！抜け道！！」

「道間違えたかな〜」

元々間違った道ですが……

「あれ？こんなとこにヒト？」

そこには一本の立派な樹の下で、しゃがみこんでいる少女がいた

「キミ、どうしたの？」

「だ、誰！？」

「あ、ボクは草摩紅葉♪キミは？」

「……草摩…桜…」

「あれ？キミもソーマ家……？」

「へぇ〜サクラも本家にいるんだ」

落ち着いてから、暗い森の中で二人は話をしていた

「はい…でも＞卯＜のあなたがなんでこんなところに？」

「あ！そうそう！ボクね、道に迷ったの」

「本家ならここから帰れます…私が案内します」

「ホント！？ありがとうサクラ♪」

「いえ……」

二人は暗い森の中を歩き始めた

「ありがとねサクラ♪」

「お気になさらず……」

「そうだ！今度、いっしょに遊びに行かない！？ボクの友達も紹介するからさ！！」

「しかし……十二支の方は位が高いので、なにかあったら……」

「いいの！！ボクがいいって言ったらいいの！！」

「……はい、わかりました。今度、是非御一緒させてくださいね」

紅葉は初めて彼女が笑うのを見ました

「エへへ♪約束だよ」

「はい♪約束です」

素敵な満月の夜の素敵な出会い……

第二話・・・（前書き）

言い（書き?）忘れてました。基本的に不定期で更新します。二週間以内には更新致します

第二話・・・

ー数日後ー
紫呉の家にて

「草摩桜さんですか♪よろしくお願いしますね♪」

透、由希、夾と一通り挨拶も済ませて……

「はい、よろしくお願いします。透さん、由希さん、夾さん」

「こちらこそ」

「……」

「キョーってば黙ってないでなんか言いなよ」

「お前、本当に草摩家か？」

「はい、そうですが？」

「キョー、ブレイでしょ！」

「あー、気に障ったなら悪かった。なんか違う感じがしたもんだから」

「いえ、よく言われますから」

疑問は解決したはずなのに夾はまだなにか隠してるようだった

「さて、じゃ俺は用事があるから……」
「え～ユキ、行っちゃうの～」
「夾、ちょっと来い」
夾は珍しく文句も無しについて行った
バタン
家を出てから由希と夾は話し合いをした
「あの桜って娘、やっぱり……」
「ああ。はとりに知らせた方がいいな」

「なにして遊ぶ～？」
「ではでは、大貧民でも……」
「いいですね。やりましょう」
それから三人は時間も忘れて楽しみました

「ただいま～って新しい友達？」

帰って来たのは家主の紫呉

「あ、紫呉さん。彼女は桜さんなのです」

「お嬢さん、良かったら僕の新妻に……」

「ナンパか？紫呉」

由希と夾も帰ってきた

「いい加減僕も身を固めないと……」

「サクラはダメだよ、しーちゃん。まだ十五なんだから」

桜はそれから笑顔をたくさん見せるようになりました……

第二話・・・（後書き）

読んでいただきありがとうございます。読者…少ないっす…暇な時でかまいませんので、評価待ってます

第三話・・・

―ある日―
本家にて

「今日は学校休みだからサクラのとこ行こうかな～♪」

紅葉が廊下を歩いていると話し声が聞こえてきた

「ハリィにキョーにユキ…？」

「はとり、あの娘の病気は……」

「ああ……もう治らん」

―あの娘……？

「なんとかならねぇのか？」

「……珍しいな、夾。お前がそういうことを言うとは…」

「べ、別にそんなんじゃ……！！」

「俺達もあの桜って娘も、似たような境遇だから……」

―……サクラ…？

「サクラがどうしたの！？」

「紅葉…！？」

「ねぇ、サクラがどうしたの！？」

「それは……」

言葉を濁すはとり

「あいつは…桜は……病気なんだ」

「……ビョーキ？」

「オレでも治せないほど進行していてな……もう、長くは…無い…」

「……サクラは知ってるの…？」

「……ああ……」

その場に崩れ落ちる紅葉

「なんで、病気なのにあんな……なんでもないような……顔して……」

「紅葉……」

由希は優しい口調で言った

「紅葉がいたからだろ」

「え……？」

「紅葉が、心の支えになってたんだろ」

「ボクが……心の支え…？」

「あいつがお前と居る時が一番楽しんでる顔してたからな……」

「ユキ…キョー……ありがと」

「これからも、側にいてやれよ」

紅葉はゆっくりと立ち上がった

「当たり前でしょ！ボクはサクラのコト嫌いになったりしないよ♪」

「さて、一件落着したし帰るぞ、夾」

「ああ……」

そう言うと由希と夾は帰って行った

「さて、じゃボクはサクラのとこ行ってくるね」

「ああ、行ってこい」

「サクラ♪居る？」

「紅葉くん？居るよ」

「遊びに行かない？といっても本家からは出ないけど」

「うん、いいよ」

着いたのは紅葉の家

「ここ、紅葉くんの家だよね？」

「そこに座ってて」

「？？？」

しばらくして、紅葉がやって来た

「ヴァイオリン？」

「そう♪ボクね、ヴァイオリンが弾けるの～」

静かな庭にヴァイオリンの美しい音色が響く……

「すごいね」

「エヘヘ♪」

第三話・・・（後書き）

読んで頂きありがとうございます。次は、7月の初旬に更新予定です～

第四話・・・

「紅葉く～ん！！」

「サクラ～こっちこっち」

今日はみんなでお出かけ。透、由希、夾、紅葉、撥春、そして桜の六人だ

「わ～私、ショッピングなんて初めて～」

「ダイジョウブ！！トールもいるしユキもいるから」

「他人まかせじゃないか」

「（なんでオレがはいってないんだ…）」

少し落ち込む夾であった

「日頃の行い……」

「！！お前人の心を読むな！！」

「なぜかできた……ミステリー……」

「ねぇねぇ、紅葉くんはどっちがいいと思う？」
服を見てる二人と少し離れた所にいる四人
「ん～サクラには両方似合うよ♪」
「あ……ありがと…」
みるみる顔が赤くなる桜
「なんでオレ達も来たんだ？」
「俺がそんなの知ってるわけないだろ」
「夾君、落ち着いてください」
「落ち着きがないのは子供の証……」
「なんだと！！やるかテメー！！」
「落ち着け。店の中でブラックを呼ぶ気か」
ブラック……
「オレが……悪かった……」
かなり不本意な夾

「はいサクラ♪」

飲み物を二つ持ってきた紅葉。桜の買ったものも持っている

「ありがと」

少し離れた所で待つ四人

「二人の世界だな」

「帰って、しょうが焼き……」

「しょうが焼き好きだね…」

「ですが、紅葉君たちが…」

「お～い紅葉、先に帰ってるぞ～」

「わかった～」

あっさり承諾した紅葉

「いいんでしょうか…」

「二人きりの方がいいだろうし」

「帰るなら帰るぞ。オレはもう疲れた」

「みんな帰っちゃったね」
「私達はどうします？」
「サクラ他に行きたいとこある？」
「あ、ではあそこに行きましょう」
紅葉の手を引っ張って進んでく桜

「ここって…」
「私が紅葉くんと最初に出会ったとこだよ」
一ヵ所だけ明るく、そこに一本の樹が生えている。桜を最初に見た場所だ
「そういえばなんでサクラはここにいたの？」
「昔からここが好きなの。両親が死んでから毎日ここに来たの」
「そうだったんだ……」
忘れらていても生きている自分の母親……大事に思ってくれてる父親……

「ありがとう。もう行こうか」
「うん……」

「今日はありがと。私のわがままに付き合ってくれて」
「いいの。気にしないで」
「ここでいいよ。送ってくれてありがとう」
「ボクも家近いのに…」
「紅葉くん、用事があるんでしょ。ダメだよ」
用事とは透を迎えに行くことである
「そうだけど……わかった…」
「じゃ、また明日ね」
「うん、また明日」

振り返ると桜がいたハズの場所にはトラックがあった。桜の姿は見えない。何処かで悲鳴が聞こえる。見つけたく無いものを見つけて

しまった

「サクラ！！！」

第四話・・・（後書き）

次回で最終回です
更新は今月末です

最終話・・・

―ボクは今、病室にいる。ケガをしたわけじゃない。ケガをしたのは……サクラだ……

「サクラ！！」

「紅葉、静かにしろ」

はとりが制す

「でも！！」

それでも紅葉は引き下がらない

「病人の前で騒ぐなと言っている」

「……」

「トラックに轢かれたショックで最近落ち着いていた症状がまた現れ始めた。トラックに轢かれた傷を治してお前がそばにいてやればまだ希望はある」

「ハリィ……」

「無論、俺も全力をつくす。外で待ってろ」

「……うん……わかった……」

「ユキ……キョー……」

「はとりから連絡があってな」

「彼女の様子は？」

「今はわからない……でも、ハリィはまだダイジョウブって」

「そうか……」

安心した様子の由希と夾

「トールは？」

「起こすのも可哀相だから寝かしといた」

―次の日の放課後―

「え！！意識が戻った！！」

「ああ、さっき紫呉がはとりに聞いて来たらしい」

「紫呉にしては仕事が早いな」

「ほんとほんと」

「な～んか僕ヒドいこと言われて無い？」

ここは紫呉の家

「面会はまだ無理だろうけど、順調に回復してるらしいから近いうちに会えるはずだよ」

「わかった♪ありがとねユキ、キョー♪」

「ねぇねぇ、僕のこと無視しないでよ」

「五月蠅いぞ！！気色悪い！！」

ー一週間後ー

病院で桜に面会に来た紅葉達

「サクラ……」

「紅葉くん……」

（なんか、ドラマとかでありそうなシーンだな）

病室でベッドに座ってる桜とドアを開けて真っ先に桜の近くに行った紅葉。由希、夾、透はすこし離れている

「良かった……」

「うん……ごめんね心配かけて……」

「サクラが無事ならボクはそれでいいのよ♪」

「ありがとう。でね、話があるんだ……」

「ハナシ？」

「私、外国に行くことにしたの」

「外国？」

「うん……」

「彼女の病気は、またいつ症状が悪化するかわからない。彼女と同じ症状の人が確認された国で一緒に診てもらうわけだ」

はとりが説明する

「もう……会えないのかな」

「彼女の病気が治れば可能だろう」

「そう……だよね」

「私、絶対治して来るから！！」

「うん！！約束！！」

「感動のシーンです……」

透が泣きながら呟く

そして、桜が外国に行く日……

紅葉は空港には行かず、撥春と家にいた

「見送り……行かなくて良かったの？」

「行くとなんだか…ツラくなるから……」

「紅葉……」

「それに、約束したから……」

「紅葉…大人になったな」

「そうかな？」

―サクラ……いつまでも待ってるからね

最終話・・・（後書き）

読んでくれたみなさん、ありがとうございました。なんだかファンの方には怒られそうな内容でしたけど……では、またどこかでお会いましょう

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0631c/

春と秋

2010年10月9日00時23分発行